

『 前九年・後三年の役 』

～ 奥州制覇の野望に失敗した源氏 ～

はじめに

昨年12月に「清和源氏の真実」の演題で研究発表をさせていただきました。

8世紀後半の当時は「辺境の地」と言われていた東北地方は、坂上田村麻呂が蝦夷討伐を行って以降、しばらくは平穏な時代が過ぎました。935～941年に平将門や藤原純友による叛乱（「承平・天慶の乱」）が起こる。また1028年に「平忠常の乱」が起こり、1051年（永承6年）、ついに前九年の役が勃発したのです。後世、前九年と後三年の役は、源氏が奥州に進出できた足掛かりとしているが、本当だろうか？……………。

◇前九年・後三年の役の名称の由来

前九年の役（1051～1062）は12年間。後三年の役（1083～1087）は5年間であるが、何故、このような名称となったのか。

もともと前九年の役は本来の戦闘期間通りに『吾妻鏡』（1210年11月23日条）に、「奥州十二年合戦絵」なる絵巻物が京都より鎌倉幕府三代将軍・源実朝に贈られたことが記されている。

ところが、後三年の役の名称が先に成立し、奥州十二年合戦から三年を引いた前九年の呼称が成立したとする説が有力である（「後三年の役」の三年は、源義家が参戦して京都に凱旋した迄の三年との説がある）。



～前九年合戦将軍頼義陸奥への進発の図～

『 前九年合戦絵詞 』より

(国立歴史民俗博物館蔵)

1. 前九年の役

開戦まで

陸奥国の有力豪族安倍氏は、陸奥国の奥六郡（胆沢・江刺・和賀・稗貫・紫波・岩手）に柵を設け、半独立的な勢力を形成していた。

◎乱・変・役・陣等の戦の違いは……？

	事 例	使い分けの違い
乱	応仁の乱、島原の乱	反乱を起こした権力者によって鎮圧された戦い。
変	本能寺の変、桜田門外の変	反乱を起こした結果、権力者が倒され、政治的変革が伴った戦い。
役	文永・弘安の役	戦役の略。「……合戦」
陣	大阪冬の陣・夏の陣	権力者の命によって、傘下の勢力が義務的に参集した戦役。

(1) 初戦の「鬼切部の戦い」について

『陸奥話記』(後述)には、「永承年間に陸奥守・藤原登任は、安倍頼良が官地である衣川の南を勝手に横行するのを見かねて、秋田城介・平繁成の援軍を求めて叩こうとした」とある。

この鬼切部の戦いについて、登任・重成らの軍勢が敗れ、多数の戦死者が出たとも記されている。その結果、頼良を追討するため、陸奥守兼鎮守府將軍として源頼義が任じられ、陸奥に下向させられたようにも記されています。

【検 証】

この鬼切部の戦いは、一般に宮城県大崎市鬼首での出来事とされてきました。しかし、陸奥守と秋田城介という奥羽の二大巨頭が大規模な征討戦に出陣し、しかも大敗し数多の死傷者を出したのであれば、その記録が平安時代の事件等を掲載した『扶桑略記』・『帝王編年記』等に一切見出せない。



当時の陸奥・出羽両国の地図

そして、秋田城介平重成は平惟茂の子で名のある兵であったが、この『陸奥話記』の記述によって、実は武勇の器ではなく、頼義とは比較にならぬほどの取るに足らない凡将であったと読者に印象付けるための作為だったようであり、前述の通り、「鬼切部の戦い」で朝廷側にあれほどの死傷者が出れば、後述の恩赦を受けける事はありません。「鬼切部の戦い」はさほどの戦でなかった可能性が高い。

(2) 「阿久利川事件」

永承7年(1052)、後冷泉天皇の祖母・上東門院の病氣快癒祈願の為に大赦を行い、安倍氏も朝廷に逆らった罪も赦され、安倍頼良は陸奥に赴いた頼義を饗応し、頼義と同音であることから、自ら名を頼時と改めた。

こうして無事に頼義の任期が終わる天喜4年

(1056)、胆沢城の鎮守府に赴き、数十日を
過ごした。その間、頼時は頼義に駿馬等を献上し、ひたすら恭順の意をあらわすのに務め
た。ところが頼義が多賀国府に戻る途中、夜間阿久利川まで来た際、頼義一行に加わって
いた権守藤原説貞の子の光貞らの野宿で、人馬が殺傷されたと告げたのである。

頼義が容疑者を尋ねたところ、光貞は「安倍頼時の嫡男貞任が先年、私の妹を娶ろうと
したが、家柄が卑しいので断られたことに恨みを懐いて犯行に及んだ」と答えた。頼義は
怒って貞任を処刑しようとしたが、それを聞いた安倍頼時は「人の世にあるのは皆妻子の
ためである。貞任が愚か者でも父子の愛に変わりない。貞任が誅に伏するのは忍がたい。
たとえ戦が利あらず戦死しても、それでよいではないか」と言いはなった。一族も同意し
精兵を集め、攻撃の準備を整え、再び戦端が開かれたのである。

【検 証】

この阿久利川事件は『陸奥話記』に登場するが、貞任はすでに結婚しており、頼義は
貞任に尋問することなく、処刑をするとの返答。また安倍氏一族が抗戦の態度を固めた
ならばすぐにも両軍の激戦が展開しようものであるが、『陸奥話記』の記述も、しばらく
の間、安倍氏軍はひたすら防戦に徹して、少なくとも翌天喜5年11月の黄海合戦までは
源氏軍に対して、積極的な攻撃を仕掛けていない。

合戦後、筑前国で流人としていた安倍頼時の三男宗任の証言を載録した『今昔物語集』
においても、この事件への言及がまったくなくことである。

(3) 『陸奥話記』とは

『陸奥話記』(以下『話記』と記す)は前九年の役の顛末について記した戦記物語。
11世紀後期頃に成立したとみられる。作者は不詳とされてきたが、近年の研究の成果で、
平安後期を代表する文人学者として有名な藤原明衡か大江匡房との説がでてきた。

末尾に「諸国から朝廷に上申されたものや衆口(多くの人)の話拾って、これを一
巻に注せり。小生但し千里の外なるを以って、定めて間違いが多いと思われる。実を
知れる者、これを質さんのみ」とあり、安倍氏を悪しき存在として、安倍頼時の国家へ
の不服従、そして安倍貞任の蛮行(実際は貞任は無実)を描き出し、天下に武勇の聞こ
えた源氏による安倍氏追討を正当化し称賛する「源氏史観」を全面に描かれている。

『話記』の冒頭について…。

① 流布本系の本文(水府明德会彰考館蔵本) 「六箇郡司に、安倍頼良という者あ
り。是れ同忠良が子なり。父祖忠頼は東夷の酋長なり……………(以下略)」

② 前田育徳会尊経閣文庫蔵本 「六箇郡が内に、安倍頼良という者あり。是れ同
忠良が子なり。父祖俱に果敢にして、自ら酋長を称す……………(以下略)」

※現存する殆どの写本が①の流布本系で、②のタイプのもものが原本に近いとされている。

この①の流布本から、安倍氏の出自が蝦夷であるかの如く、伝承されてきたが、次項
の「安倍氏・清原氏の出自」で触れたい。

(4) 安倍氏と清原氏の出自

安倍氏及び前九年の役で中途から源氏側として参戦した清原氏については、蝦夷系の血筋を引く在地豪族とされることが多かった。

しかし、近年では14世紀に成立した『安藤系図』では、奥六郡安倍氏の直系の先祖が中央氏族安倍朝臣氏にあたるとしている。

『範国記』(長元9年(1036))に奥六郡の当主・安倍忠好(前九年の役の頼時の父)が陸奥国で守に次ぐ高官である権守ごんのかみに任じられたことが記されている。

清原氏についても、「出羽山北せんぼく俘囚王」の通称や「えびすのいやしき名」といった偏見があったが、清原氏が皇別の真人まひと(「八色姓」の最上位の序列)の父系出自をもつものであることが判明した。

昭和25年頃まで、「蝦夷=えぞ=アイヌ説」が主流となっていたが、その後「えぞ=辺民説=非アイヌ説」が主流となってきたとの風潮がうかがえる。

また、中尊寺の奥州藤原氏四代の遺体学術調査が昭和25年に実施された(清衡・基衡・秀衡はミイラ化し、泰衡は頭部のみ)。基衡の妻は安倍頼時の孫娘であり秀衡の母である。

上記三体の遺骨の学術調査でも頭部や歯の状態から、非アイヌ説が立証されている。

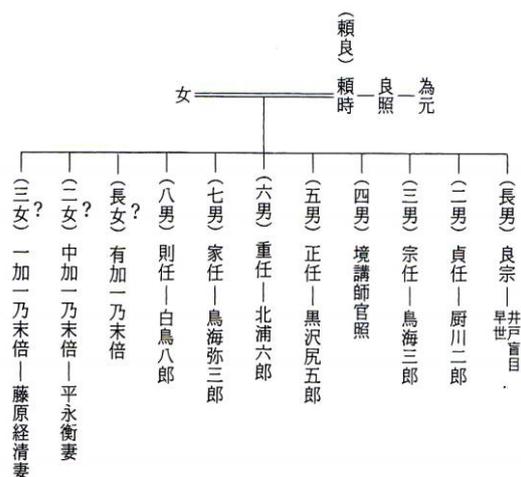
(5) 戦況

源頼義ら源氏の挑発は、貞任を斬り、安倍氏を弱体化させ、陸奥国司としての実績を上げたいものの、この理不尽な要求に安倍氏ははねのけた。以後康平5年(1062)まで足かけ7年にわたり戦は続く。ここに二人の郡司が登場する。藤原経清ながひらと平永衡である。

二人とも前国守藤原登任の官人であった。藤原経清は、後の平泉政権三代ないし四代ともいわれる藤原氏の初代藤原清衡の父である。前陸奥守藤原登任のもとで、官人の一人であった。先祖は藤原秀郷である。両名とも安倍頼時の娘を娶っている。頼義の軍が衣川に到着したところ、永衡が安倍氏に味方すると頼義に讒言したことにより、永衡を斬殺した。これをきっかけとして藤原経清は私兵八百余人を率いて頼時の陣営に走りこんだのである。

冬を越して、天喜5年(1057)、源頼義は陸奥の最北の宇曾利の安倍富忠に対し、「頼時を倒した暁には、安倍の棟梁として奥六郡授ける」と誘ったのである。頼時はそれを聞いて、手兵二千人を率いて、北方に向かう。頼時の一族であるので、話し合えば説得に応じると思ったが応じる気配はなく、伏兵を配置し頼時勢を迎え討った。

その二日目に、一本の流れ矢が総大将頼時を傷ける。重傷であった。そして、同年陰暦7月、頼時死去した。嫡男貞任があとを継いだのである。



安倍氏略系図

(6) 清原氏の参戦と安倍氏の敗北

出羽山北の豪族清原氏が動いた。清原氏は従来、安倍氏とは婚族関係でもあり、従来より肌合いを異にする源氏とは距離を置いていたが、再三の源氏の懇願に康平5年(1062)7月、清原武則は一族に総動員令をかけ出陣した。

それまで劣勢であった源氏軍は、清原氏の参戦により優勢に転じていったのである。9月15日、源氏・清原氏軍は厨川柵に布陣した。安倍氏軍の客将で頼時の娘婿の藤原経清は生け捕られ、源頼義の前に引き出され、鈍刀によって首を斬り落とされる残忍極まりない処刑で絶命した。安倍軍の指揮を執っていた貞任は剣を奮い多くの将兵を倒したが、六人がかりで囲まれ頼義の前に運ばれた。頼義は貞任に向かって「罪」を責めるも、貞任はひとたび頼義に顔を向けそのまま絶命したという。

他方、頼時の嫡子格の宗任は浅い傷を城外に脱出した。そして、安倍氏は滅んだ。翌年、安倍氏追討戦の論功行賞がおこなわれ、源頼義は自分の意に反し正四位下伊予守に、義家は従五位出羽守に叙任された。また清原武則は現地住人としては異例の従五位上・鎮守府将軍に抜擢された。源頼義は京に上る途中鎌倉途中立ち寄り、京都・石清水八幡宮より勧請し鶴岡八幡宮(現元八幡・鎌倉市由比ガ浜)を開いた。

翌康平7年(1064)2月、頼義は清原氏の庇護下の宗任・正任・真任・家任・則任ら頼時の子息を拉致し上京し、朝廷は翌月に任国の伊予へ移送することを許した。

清原氏は安倍氏の宗任を中心とした再興を目指していたものの叶わず、安倍氏奥六郡主に武則が就き、それにともない、彼の一家も出羽山北より奥六郡へ本拠を移したのである。頼義との対立を深めた武則が兄の出羽山北主光頼に働きかけ、秋田城在庁勢力を駆使して義家の追い出しを図り成功したものであろう。

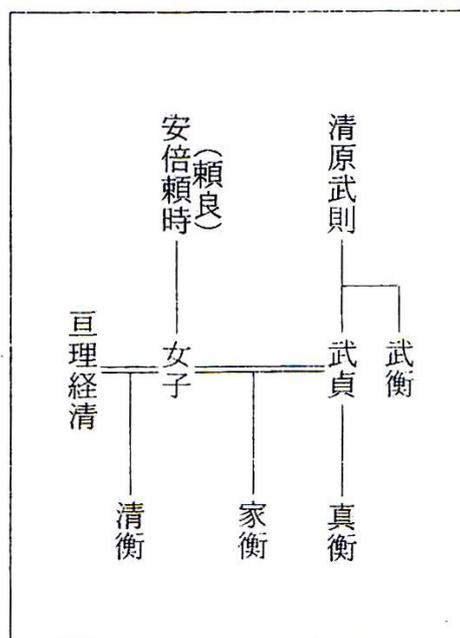
前九年役終結後から、後の後三年の役への伏線となる源氏と清原氏との対立関係が次第に深まりつつあったのである。

2. 後三年の役

背景

前九年の役で安倍氏は滅亡し、清原氏の清原武則が出羽・陸奥国一帯を治めていた。永保3年(1083)に後三年の役が始まるまでの政治状況は判然としないが、清原氏の当主は、武則の息子・武貞、さらに嫡子^{さきひら}真衡へと継承されていった。

武貞は前九年の役の終わった後、安倍一族の豪族であった藤原経清(敗戦後に処刑)の妻(有^{あり}加^が一^{いち}乃^の末^の陪^{まい})を後添えとした。彼女は安倍頼時の娘であり、経清との間に生まれ



清原氏略系図

た息子がおり、養子とした。清原^{きよひら}清衡（後の奥州藤原氏初代）を名乗る。さらに武貞と彼女の間に家衡が生まれた。

（１）清原氏の内部分裂

武貞の死後、清原氏の惣領の真衡は同家の実権を握り奥六郡主の座に就いたのは、承暦年間（1077～81）以降、永保3年（1083）以前のことだったとみられる。清原氏一門は、従来の同族連合体制から嫡宗単独支配体制を意識しはじめていた。清原氏の一族には異母弟の^{たけひら}武衡をはじめ、^{きみこ}吉彦秀武のような長老もいたが、真衡の尊大で独裁的な振る舞いに内部の派閥対立の兆しははじまっていた。

真衡には嫡男が生まれなかったため、成衡なるものを養子に迎え、源氏との縁戚関係の構築がらみで、源頼義が陸奥国に向かう途中、平宗基という人物の娘と一夜を共にして生まれた娘を成衡の嫁としたのである。

成衡の婚礼の際、出羽から成衡の叔父に当たる吉彦秀武が祝いに訪れた。真衡が碁に夢中になり、秀武を無視続けた。面目を潰された秀武は大いに怒り、持参した砂金を庭にぶちまけ出羽に帰ってしまったのである。

（２）源義家の介入と真衡の急死

真衡は秀武の行為を聞き、直ちに秀武討伐の軍を起こした。一方の秀武は、同じく不仲であった家衡・清衡に密使を送って蜂起を促した。二人は呼応し真衡に館に迫ったが真衡の反撃に遭い、決戦を避け本拠地に後退した。

家衡・清衡と戦わず退けた真衡は、永保3年（1083）の秋、成衡の妻の兄にあたる源義家が陸奥守を拜命し、多賀城（国府）に着いたことで三日間にわたり歓待し、その後出羽に出撃した。家衡・清衡は真衡不在を好機として攻撃したが、国府も真衡に加勢したため、大敗を喫して国府に降伏した。ところが出羽に向かった真衡は行軍の途中で病のため急死してしまった。

（３）清衡と家衡の抗争

真衡の死後、義家は真衡の所領であった奥六郡を、和賀・江刺・胆沢を清衡に、紫波・稗貫・岩手を家衡に与えた。

ところが、家衡はこの裁定を不満として、応徳3年（1086）に清衡の館を攻撃する。清衡の妻子一族は殺されるが、清衡自身は生き延び、義家の助力で家衡に対抗した。しかし、季節は冬であったこともあり、清衡・義家軍は攻めあぐね敗れる。

寛治元年（1087）、義家・清衡軍は吉彦秀武の提案で金沢柵の家衡軍に兵糧攻めを敢行し、勝利を収めた。

（４）戦後処理

朝廷はこの戦いを義家の私戦とし、勸賞はもとより、戦費の支払いも拒否し、陸奥守も解任された。そのため新たな官職に就くこともできず、結果として義家は主に関東から出仕した将兵に私財から恩賞を出し、これが後世源氏の名を上げたに過ぎない。ただ清衡は清原氏の旧領全てを手に入れ、実父藤原の姓を継ぎ、清原氏の歴史は幕を閉じた。

逸話

1. 雁行の乱れ

源氏軍が家衡軍の籠もる金沢柵へ行軍中、西沼（横手市金沢中野）の付近で義家が馬を止め、通常は整然と飛ぶ雁が乱れ飛んでいた。これを見た義家はかつて大江匡房から教わった孫氏の兵法を思い出し、家衡軍の伏兵ありと察知し、これを殲滅した。

※実際は大江匡房が義家より若いため、そのようなことはありえない。「雁行の乱れ」はエピソードとして作られた話と思われる。

2. 鎌倉権五郎景政の奮戦

源義家の先鋒軍に鎌倉景政（権五郎）という16歳の若武者がいた。清原軍の放った矢が右目に刺さるも、その敵を逆に射殺し、自陣に帰った。苦しむ景政に対し、仲間の三浦平太郎為次が矢を抜こうと景政お顔を足かけた。

景政は為次に斬りかかった。「武士であれば、矢が刺さり死ぬのは本望だ。土足で顔を踏まれるのは恥辱だ」と言ったという。為次は謝り丁重に矢を抜いたと伝えられている。

※景政の子孫には鎌倉幕府創建の功臣梶原景時がいる。

(完)

◎昨年の当会創立35周年記念式典・祝賀会にご臨席頂いた、岩手県歴史研究会の会長川村誠二様（ご住所が盛岡市前九年）に、この発表の件をお話したところ、下記参考文献の「前九年合戦終焉950年記念 平和祈念シンポジウム」と「備後安倍氏の伝承」をお送り頂いたのです。この「備後安倍氏…」は560ページの大作で、読み終えた後、ご返送させて頂きました。

大変参考になり、この紙上ではありますが、厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

「前九年合戦絵詞」		国立歴史民俗博物館蔵
「前九年合戦終焉950年記念平和祈念祭シンポジウム」		岩手県歴史研究会
「備後安倍氏の伝承」		安部貞隆
「源氏一族のすべて」		新人物往来社
「蝦夷の末裔」	高橋 崇	中公新書
「前九年の役と安倍一族」	上野昭夫	盛岡タイムス社
「源 頼義」	元木泰雄	吉川弘文館
「前九年の役・後三年の役」	伊藤勝也	無明舎出版
「奥州藤原氏」	高橋 崇	中公新書
「辺境の争乱」	庄司 浩	教育社
「石井進著作集3」	石井 進	岩波書店
「前九年・後三年の合戦と兵の時代」	樋口知志	吉川弘文館